

若い男が一人、森の中を歩いている。

木々の背は高く、道は薄暗いが、見上げれば、雲ひとつない空であった。

しばらく行くと、広場のような場所に出た。今にも崩れ落ちそうな柱が何本か立っている。

かつて神殿でもあったかのようだ。

その柱の台座のところに、人が腰かけている。性別も年齢も、はっきりしなかった。

男は、その人に近づいた。

「ここで、何をしていますのですか」

相手は何も言わなかった。

「私にはやりたいことがあります。そのために何をすればいいか、どうすれば上手くいくか、探しているのです。色々な場所へ行き、様々な人に話を聞きました。でも、まだそれが見つかからないのです」

反応がない。男は構わず続けた。

「しかし、これでいいのかもしれないと思うようになりました。これが生きることなのかもしれません。というのも」

突然、相手が大きなあくびをした。目を擦っている。

「これは失礼をしました。眠りの邪魔をしてしまいましたか。ひとに出会うと、つい声をかけたくなるのです。しかし、最後に一つ、この愚かものに」

そのとき、ようやく相手がこちらを見た。そして口を開

いた。

「煩い」

そこで、男はめまいに襲われた。

見回すと、森の中で一人、立ちすくんでいた。

目を開けたまま夢を見ていたようだ。

男は、歩き始めた。

木々の背は高く、道は薄暗いが、見上げれば、雲ひとつない空であった。